

病理診断科

科の説明

病理診断科では、生検・手術材料や病理解剖材料による病理組織診断と細胞材料による細胞診断が行われています。がんなど最終診断は病理診断により成されることが多く、これら診断に基づき、治療方針や予後が決定されています。また、最近では免疫染色などを利用した治療方針決定などその重要性は増してきています。さらに病理解剖とこれに対する臨床病理検討会は臨床研修では必須であり、また、生検・手術材料による各臨床科との検討会も増加しており、臨床へのフィードバックとしての役割をはたしています。

一般目標

病理診断の必要性和組織・細胞所見を理解する能力を経験し、生検手術材料・病理解剖・各種カンファレンスを通じて臨床経過と疾患の本態の関連を総合的に理解する能力と、症例検討会・報告書作成などで適切に発表する能力を身につける。これらを通して臨床に必要な基本的診療能力を習得する。

行動目標

- 1) 病理組織検査や細胞診断検査の標本作製過程を理解する。(知識)
- 2) 電顕・蛍光染色・免疫組織化学などの手技を理解する。(知識)
- 3) 病理組織検査や細胞診断検査が診断・治療においてとくに有用な疾患を想定できる。(想起)
- 4) 基本的な組織診断・細胞診断が行える。(技能)
- 5) 組織・細胞診断の基本的な所見とその示す意味を説明できる。(解釈)
- 6) 病理指導医の下、病理解剖を行える。(技能)
- 7) 病理解剖の法的制約・手続きを説明できる。(想起)
- 8) ご遺族に対して病理解剖の目的と意義を説明できる。(解釈)
- 9) ご遺体に対して礼をもって接する。(態度)
- 10) 臨床経過とその問題点を的確に説明できる。(問題解決)
- 11) 病理所見(肉眼・組織像)とその示す意味を説明できる。(解釈)
- 12) 病理細胞診断・解剖症例の報告が適切にできる。(解釈)
- 13) 臨床各科との適切な議論・コミュニケーションができる。(態度)

経験目標

- 1) 検体処理を含めた診断までの過程の理解
- 2) 組織・細胞診材料を通して、各病変の基本的概念や診断確定・治療の課程を理解
- 3) 剖検症例を通して、病理解剖の意義を理解
- 4) 手術症例・剖検症例を通して診断書作成と発表する能力を養う

指導体制

指導医（病理医）が主として指導全般を行う。

週間スケジュール

	午前	午後	時間外あるいは随時
月曜日	講義, 手術生検材料処理	病理診断	各種検討会
火曜日	講義, 手術生検材料処理	病理診断	各種検討会
水曜日	講義, 手術生検材料処理	病理診断	各種検討会
木曜日	講義, 手術生検材料処理	病理診断	各種検討会
金曜日	講義, 手術生検材料処理	病理診断	各種検討会

定例研修会等

会名	世話人	開催日時	会場	備考
CPC	矢花	随時	研修実習室	研修医のプレゼン
腎症例検討会	大西, 矢花	毎水曜日/随時	病理診断室	
消化器検討会		第4金曜日	内視鏡室	
肝生検症例検討会	小島・矢花	随時	病理診断室	
腎泌尿器症例検討会	芝原・矢花	随時	病理診断室	
外科症例検討会	外科高橋	毎金曜日	オペ前室	

具体的な研修方法・留意事項

- 1) 病院病理業務は手術・生検組織診や細胞診材料を対象にして、疾病の診断を行い、治療方針決定、治療効果の評価を行う外科病理と、不幸にして亡くなられた方のご遺体を解剖させていただくことにより、症例の全経過を観察し、病態や病因・死因の解明に努める剖検が2本の柱となる。
- 2) 研修では、検体処理を含めた診断までの過程の理解と電顕・蛍光・免疫組織化学的検査の実際を理解するとともに病理診断の基礎を研修する。
- 3) 剖検症例では、実際の解剖、症例の病理学的観察、臨床所見の理解、これらをまとめてCPCでの報告を行う。
- 4) 他科研修中においても、可能な限り剖検に立ち会い、CPCで報告する。
- 5) 具体的な研修内容

◇検体処理

- (1) 生検・手術材料の処理と適切な標本作製方法
- (2) 細胞診材料の処理と適切な標本作製方法
- (3) 組織・細胞診断について目的に応じた特殊染色法
- (4) 電顕・蛍光抗体法、免疫組織化学法、その他特殊診断技術の理論と手技の実際

◇病理診断

- (1) 組織・細胞診材料を通して、各病変の基本的概念や診断確定・治療の課程を理解し実践できる能力を養う
- (2) 剖検症例を通して、病理解剖の意義を理解し、病理最終診断を作成・CPCでのまとめを行う。